

特集補遺・翁久允

※翁久允は『とやま文学』第16号で特集

「高志人」から「高志」へ

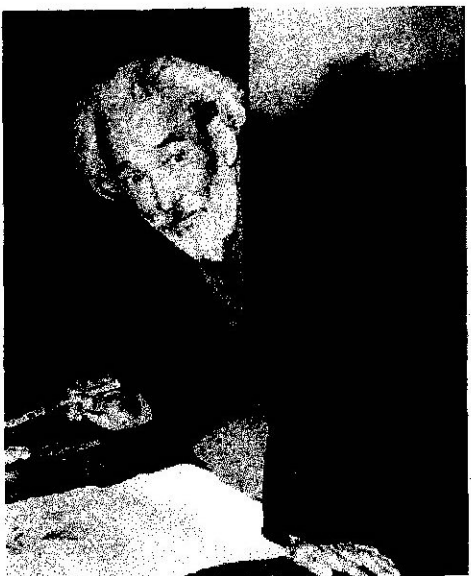
―翁久允年譜抄 一九四四（昭和十九）年 五十六歳

須田 満 編

一九三六年九月二十日、翁久允は、郷土研究誌「高志人」を創刊と同時に東京の芝虎ノ門会館の一室を事務所として高志書房を設立する。四五年三月の東京大空襲後、富山県に疎開するまでの間、久允は東京と富山を往来して、東京と富山で半々の生活をしながら富山県内を隈なく踏査し、また講演活動を展開していた。

四一年七月、富山文化協会の創立を提案し、横山四郎右衛門、寺田仙之助、西尾勤吾と共に常任理事に就任し、高志人社を事務所として活動するも、《長らくアメリカにゐたと言ふので、自由主義者だの、ユダ人的》だとの非難され、四二年七月に理事を辞任。同年九月、「高志人歌壇」「高志人俳壇」「高志人詩壇」を創設し、歌壇を藻谷銀河、俳壇を金尾梅の門、詩壇に高島高を客員とし、《「高志人」は本来の高志人にたち帰つて、同志と共にゆくことにした。》

本稿は、一九四四年の翁久允の活動を主に「高志人」および「高志」に久允が執筆したものを旧かなと新漢字で《》内に引用し、「」内に編者が補足し、「翁久允年



譜抄」とするが、その出典箇所は割愛する。なお、高志句会に参加した俳号呉東、覚之助、稻生、寛花の苗字は不詳である。

一月一日、釈迦、不動、観音の三尊精神の真正愛運動を起すため「三尊三千体謹写」して三千人の友人に贈る悲願を立てる。

一月二日、初孫允宣（長男直の子）アメリカで誕生。

二月七日、三上於菟吉逝去。十八日、文学報国会の告別式に参列する。

三月末、四月上旬、日本出版会雑誌課より、《地方雑誌の処置については地方特高課が重要な役割をつとめることになつたから、同課とよく懇談してもらひたいと言つたやうな回答を受けた。殆ど同時に特高課から出頭命令があつた。行つてみると、地方官庁委託になつてゐた地方雑誌の経営者達も来てゐた。結局、地方庁は一斉に廃刊して、その上で協議をかさね、新しい文化雑誌を創刊してもらひたいと言つたやうな意向だつた。相談し合つた結果、六誌は一同廃刊することにした。》

四月十日、午後四時より、富中知名会、第四回総会を開催。会長石原正太郎の逝去のため石坂豊一を会長に選任。世話人である寺田仙之助、長枝春秋、島倉孝太郎、湊栄吉、翁久允は再選。

四月十七日、《共同挨拶／時局に鑑みて廃刊し、左記六社

合同して新しく発足することになりました。ご協力を願ひます。／昭和十一年四月十七日／國魂社／富山県人社／越中郷土研究社／スバル社／辛夷社／高志人社》

四月末、《四五年親み馴れた》富山電気ビル三階のフロアは海軍管理部に占領された。この頃《もう絶対に勝てないと思ひもし、又主張もしたりしたことから「敗戦主義者」とか「親米主義者」と批判する人と共に不穏な空気に脅かされることが度々あつた。》高志人事務所は、富山電気ビル三階から富山市荒町十一番地の仕出し屋「茶木屋」の二階の二十畳の部屋に引越す。

五月一日、「高志人」は《昭和》十九年五月一日附をもつて、内務大臣宛に廃刊届を提出》する。

六月四日、第一回高志人郷土研究会が清水勝次郎、八田清信らが発起人となり開催され、藤井尚治中心の座談会となる。

六月二十日、「高志」と言ふ新しい統一的地方誌の創刊号が発行される。編集人翁久允、発行人高島多作、印刷人寺田仙之助、印刷所高志社（富山市荒町十一）、高岡支社（高岡市栄町二二四）、東京支社（東京都大森区調布鶴ノ木二〇九）、配給元日本出版配給株式会社（東京都神田淡路町二ノ九）。読者層は、高志人会員と富山県人社の会員が主流。「高志」は四五年六月十五日まで刊行された。

六月二十日、「梅檀野誌」の著者で「高志の般若郷」を「高

志人」に執筆した土田古香が、庄東名勝旧蹟保存会事務所で、翁久允らを招き発表会を行う。

七月十五日、「高志 石川県人号」七月号（六、七月合併号）が、高志社より発行され、久允は、「神幻想思」を掲載。同誌は、石川県人号編輯部（金沢市上本多町一番丁四）が従来編集してきた「石川県人号」を、「高志（石川県人号）」の誌名で発行したもので、発行人が高島多作印刷人が寺田仙之助。九月号と終刊号も存在するが、高志社からの発行の経緯は、紙の配給実績によるものかなどの経緯は不明。

七月三十一日、第二回高志人郷土研究会「小林正治教授中心の良寛」。

八月十日、第三回高志人郷土研究会「川田順中心の和歌座談会」が、桜木荘（旧蓮沼安太郎邸）で開催。

八月二十七日、第四回高志人郷土研究会「矢野蓬矢中心南方俳趣味座談会」が、富山ホテルで開催。

九月、二女日美は、女子美術専門学校校師範科日本画部を繰り上げ卒業。

九月三日、第五回高志人郷土研究会合会「佐山清次郎中心家紋の研究」を開催。

九月九日夜、高志句会が高志人社で開催。参加者は、寺田素天仙、谷本四葉、呉東、市江雨帆、大坪銀蛙、小林深秋、中山陶梧楼、田中穂里、覚之助、高沢菁々子、栃折越人、大橋水人、吉田三峰、中島杏堂、市川山雨、中村

月稲、中村炬子、稲生、金尾梅の門。

十月三日、北日本新聞社講堂で菅原道真の講座のため来富した大佛次郎から電話があり、夕食を共にする。高志人郷土研究会は九月と同様に佐山清次郎中心に家紋の話となり、大佛、大正大学教授筑土鈴寛、日本文学報国会の橋本栄蔵も参加。

《昔のヨロコブなハイカラがバイコフの如く白髯をのびしすっかり郷土人になっている。亜米利加から帰って日本を覗き未来の日本の力は郷土研究からと感じたという。雑誌社はもと料理屋の二階にある。魚も新しい。郷土研究者数人が集まって座談に加わる。カラフトでの暮しからアイヌ語の研究をしていると云う人「藤井尚治」や郷土の家紋を研究している人「佐山清次郎」など、それぞれ唯我独尊のところあり。》

十月十二日、吉井勇夫妻が来富。小又幸井、谷本四葉、寺田素天仙、黒坂富治、藻谷銀河、翁久允が富山駅に迎える。富山市荒町の金井久兵衛邸で翁、藻谷、小又、谷本、寺田、黒坂、宇野竹里、金井、高勢茶人が「海老亭」の料理を囲む。

十月十三日、小又幸井が用意した車で、吉井勇を大山寺公園の川田順の「鶯」歌碑に藻谷銀河と共に案内し、雄山神社を詣でる。午餐を山田昌作の招待で、富山電気ビルでとる。午後二時、第六回高志人研究会「吉井勇中心の座談会」を桜木荘で開催。参加者は、藻谷銀河、寺

田仙之助、佐藤貞蔵、高田甚四郎、高田範国、田上清貞、荒木得三、広田宙外、牧田牧水、平井庫、山崎武義、柴田象一郎、藤田清風、織田重慶、深山栄、小川象次郎、八田清信、佐山清次郎、橋江繁、菊地靖雄、村井庄作、和田徳一、大西方郎、尾崎進、高田菊枝、大槻みつ子、山村貴美、下村民子、進野貞子、高見啓一、深井龍太郎、村安太郎、市川山雨、森六郎、清水勝次郎、福田美明、能森米子、片口ゆり子、多田節子、左近静子、大石太郎、川崎順二、谷本武夫。

十月二十五日夜、高志句会が高志人社で開催。参加者は、栃折越人、谷本四葉、高沢菁々子、野口永芳、覚之助、大坪銀蛙、市川山雨、中島杏堂、金尾梅の門。

十一月九日、午後二時、第七回高志人研究会「野口米次郎中心の座談会」が桜木荘で開催。野口の演題は、「印度の詩精神」と「ガンジを語る」。参加者は、竹内朔郎、高沢華亭、下村秀雄、久泉共三、清水勝次郎、佐山清次郎、羽柴茂治、広田理右衛門、和田徳一、大西方郎、市川茂吉、山本勇次、大多賀敬輔、清水秀雄、村安太郎、上子俊秋、松島治重、佐藤種治、織田重慶、山崎武義、高邑虎次、高田力、藤井尚治、中山陶梧楼、高島義一、谷本武夫。野口は、金井久兵衛邸に宿す。

十一月二十六日、午後三時、高志社で第八回高志人研究会「高木友三郎中心の講演」を開催。参加者は、佐山清次郎、吉田武善、栃折健次郎、高木宏、石川清隆、金子安太郎

富樫政太郎、広田理右衛門、平田賢治、深井龍太郎、浜本貞芳、山下栄次郎、高田甚四郎、金井久兵衛、柴田象一郎、鷹取健次郎。

十一月二十五日夜、高志句会が高志人社で開催。参加者は、翁六溪、谷本四葉、市江雨帆、栃折越人、吉田三峰、中島杏堂、市川山雨、村井冬晴、小川深秋、高沢菁々子、中村炬子、金尾梅の門。

十二月二十五日、高志句会開催。参加者は、覚花、村井冬青、高沢菁々子、栃折越人、谷本四葉、翁六溪、中島杏堂、市川山雨、中村炬子、金尾梅の門。

〔註〕

1 三九年七月二十六日、掃米二世の宣は渡米。四一年十二月太平洋戦争開戦後四二年五月、カリフォルニア州サンフランシスコ集合センターに入り、同年十月ユタ州トパーズ戦争移住センターに移動。四三年九月トゥーリーレイク戦争移住センターに収容され終戦を迎え、四六年一月に帰国。

2 四一年二月四日、《富山中学校出身者にして五十歳以上の人士を中心に「知命会」を創立》。世話人は、長枝春秋、寺田仙之助、翁久允で、第一回総会は、富山電気ビル内の富山水曜会「富山社交倶楽部は四一年一月二日の総会で改称された」で開催。岡本重保を初代会長に選出。

3 《「高志」は去年八月一日の富山戦災前に七月号を出そ

うとしてゐたが、當時を顧みると全く夢のやうで、疎開騒ぎのただ中であつた。原稿は全部出来てゐたけれど、印刷に附することができなかつた。そして丸で焼いたのだ(「高志人」11巻1号3月号2頁)。「高志人」は、四六年二月二十五日、富山印刷興行社が戦災を受けたため、北日本新聞社印刷部に依頼し復刊された。

- 4 ニコライ・バイコフ(一八七二—一九五八)ロシアのキエフ生まれの小説家。第一次大戦やロシア革命に従軍し、革命後満州に亡命し、満州の大原始林を舞台にユニークな動物文学を執筆。四二年大東亜文学者大会に満州国代表として来日。
- 5 《今年「四三年」の元日は私も「数え」五十六歳になつたので、崇敬している山本「五十六」元帥の名にあやかる何かの記念にと思つて、顔を剃らないことにした。(翁久允「煩悩の弁」、「高志人」、8巻10号16頁)。
- 6 大佛次郎「敗戦日記」(一九九五年、草思社)。
- 7 吉井勇「立山遠望」(「高志」、1巻6号3頁)。
(すだ・みつる)



編集後記

◆今回の「とやま文学賞」は県内外から六十三作品の応募があり、地元選考委員の選を経て、菅野昭正先生と川本皓嗣先生に最終選考していただきました。
とやま文学賞は俳句一名、佳作が小説・評論・短歌・川柳の四名でした。今年度から小説・評論など長編の佳作も掲載します。来年度の活発な応募を期待いたします。

◆今号から「特集補遺」のコーナーを設けました。以前に特集したテーマに関心のある多くの方のため、現在の探究成果の一端を紹介するものです。

◆カラータラピアでは、日本舞踊家の藤間蘭黄氏と富山の手練れの舞踊家・演奏者らによつて、伝統と先進が見事に融合した二つの舞台を取り上げました。
前者の大伴家持生誕千三百年記念「越中万葉創作舞踊」万葉高志の国公演は、久泉迪雄氏原作、藤間氏と本県洋舞協会の舞踊、音楽・照明・映像が一体となった素晴らしい舞台でした。舞踊評論家の高橋森彦氏には、幅広い視点から、杜大かつ緻密な舞台に光をあてていただきました。
後者の舞と箏と語りによる「葵上」公演は、黒川真理氏らの演奏に、藤間氏と可西舞踊研究所の舞踊、小泉邦子氏の朗読が加わり、心震わす舞台となりました。舞踊評論家のうらわまこと氏からは、舞台での和と洋の見事な統合の背景に、出演者間の深い信頼関係があることなど、大きな示唆をいただきました。

前者での共演をきっかけに藤間氏と黒川氏らの交流が深まり、後者の舞台が生まれたと聞きます。とやまの地を触媒に、素晴らしい交流と創造がなされたことに深い感慨を

覚えます。両者の舞台の燦めきを、写真家の瀬戸秀美・高橋鐵夫・前田正行の三氏に捉えていただき、改めて舞台の素晴らしさを実感いたします。

◆特集では、多彩な文筆活動を行ったジャーナリスト、横山源之助と井上江花を取り上げました。ともに明治四年生まれ、民衆に寄り添い県内外に大きな影響を与えた郷土の偉人です。ご協力いただいた執筆者のおかげで、横山と井上の業績が多彩な観点から紹介されたことに深く感謝いたします。黒崎真美氏の研究資料による年表、城崎しおり氏作成の文献目録にもご留意ください。本年度の米騒動百年を期に、今後の二人の文筆活動の研究のきっかけとなれば幸いです。

◆最後になりましたが、編集に当たっては企画懇話会や編集委員の方々をはじめとより、関係者の方々から多大なご協力をいただきました。心より感謝いたします。

(晶)

とやま文学 第三十七号 平成三十年度(年刊)
平成三十一年三月二十日発行
定価一〇〇〇円(税込)
編集・発行 (一社)富山県芸術文化協会
会長 加藤 淳
〒930-0006 富山市舟橋北町七番一号富山県教育文化会館内
☎(七五)四四一八六三五(内線二三三)
印刷 株式会社チユーエツ